

熊本県・福岡県での問題広葉水田雑草

ナガボノウルシ

協友アグリ株式会社 普及営業部
徐 錫元

ナガボノウルシ (図-1, *Sphenoclea zeylanica* Gaertn) は、熱帯アフリカ原産とされる一年生草本で、世界の熱帯から亜熱帯にかけて広く帰化している (清水ら 2001)。著者も 2012 年にタイ中部のspanブリー県の稲作地帯で観察したことがあり、現地の主要な広葉雑草である。除草剤 2,4-D 抵抗性変異の存在、線虫抑制やアレロパシー関連物質など種々の特性を持つとされている (清水ら 2001)。

日本では、1965 年に熊本県玉名市で初めて採集され、現在では熊本県や隣接の福岡県で問題化している (図-1A,B, 川名・児嶋 1998; 協友アグリ株式会社 2016; 森田ら 1991)。東南アジア等の海外から輸入した稲わらや家畜飼料等に混入してきたものと考えられている。

(1) 形態的特徴と見分けるポイント

全体は無毛で軟質、茎はやや多肉質である。よく分枝しイネの草高よりも高くなる (図-1B)。葉は長楕円形であり、短い柄で互生する。茎は中空である (図-1C)。夏に茎の先端や節間に棒状の花序を出し (図-1A), 5mm 程の白い花を咲かせる (清水 2001)。

(2) 水田での発生

川名・児嶋 (1998) によると、種子の発芽率は 15°C 以下で 0%, 20°C で 12%, 25°C~35°C で 76%~86% と高温ほど高い。一般的にナガボノウルシは移植直後での発生は少なく、中干し頃になると発生してくる。発生は田面が露出し畑地状になりやすい圃場に多い。成植物では水中茎下部より多数の不定根が発生している (徐 2017)。西日本では、イネを食害するスクミリンゴガイ (ジャンボタニシ) が問題となっており (図-2), この被害軽減に水田を浅水管理とするが、その際、圃場内に田面が露出する部分ができる。このこともナガボノウルシの発生を助長していると考えられる。

(3) 水田での防除

ナガボノウルシに対して高い除草効果を示す有効成分は多



図-1 ナガボノウルシの生育

A. 棒状の花序を見せている成植物 (2016 年 8 月上旬, 熊本県菊池市), B. 蔓延圃場 (2016 年 8 月上旬, 熊本県菊池市), C. 中空の茎 (2016 年 8 月上旬, 熊本県山鹿市)



図-2 イネを食害するスクミリンゴガイ (2016 年 8 月下旬, 熊本県山鹿市)
注) 深水はスクミリンゴガイにとっては好適な生育環境である。

いので、これらの成分の入った初期剤や一発処理剤を使用する (協友アグリ 2015; 川名・児嶋 1998)。しかし、その発生が中干し頃であり、また、田面露出部分での発生が多いことから、一発処理剤だけでは防除できないことも多い。この場合は、初期剤との体系処理や、発生後はベンタゾン等の中後期剤との体系処理が効果的である。また、本種の発生の大きな要因は、田面が露出することにもあるので、圃場が露出しないように十分に湛水することも重要である。ただし、深水とするとスクミリンゴガイの生育環境を良好にし、イネの食害を助長するというジレンマもあるので注意が必要である。大きくなった個体は、手で抜き取る。

引用文献

川名義明・児嶋清 1998. 日作九支報 64, 31-33.
協友アグリ株式会社 2015. ピラクロ NEWS 第 7 号.
http://www.kyoyu-agri.co.jp/farm/news_pdf/news_20151001.pdf
(2017 年 11 月 21 日アクセス確認)
森田引彦ら 1991. 雑草研究 30(別), 66-67.
徐 錫元 2017. 植調 50(10), 1-4, 27-28.
清水矩宏ら 2001. 「日本帰化植物写真図鑑」. 全国農村教育協会, 東京, pp.311.